

鳥取城「中ノ御門」の歴史と特徴

表門と渡櫓門で構成される「中ノ御門」は、鳥取城の大手門として元和7年(1621)に、藩主池田光政によって創建されました。享保5年(1720)の大火で城内のほとんどの建物が焼失するも、表門は同年中に、渡櫓門は享保9年(1724)に再建されることから、鳥取城のなかでも重要な区画であったことがわかります。鳥取城は、廃城令においても軍事的利用価値が認められ存城となりますが、明治12年(1879)にその役目を終えるに際して、城内の象徴的な櫓群は順次撤去されていきました。このうち「中ノ御門」は、明治8年(1875)に解体されました。

「中ノ御門」は、柵形虎口に高麗門と櫓門を備える近世城郭ならではの配置を基本としつつも、広くひらいた虎口いっぱいに表門を構え、石垣上に配した土塀を表門の棟まで高く築き上げるなど独特な門構えをしているほか、渡櫓門においては屋根に切妻造を採用するなどの特徴がみられます。



進む鳥取城復元事業

鳥取城は、江戸時代には全国約300藩あるなかで上位12番目の規模を誇る鳥取藩32万石の居城でした。かつて大藩であった鳥取城の姿をわかりやすく後世に伝えるため、鳥取市は平成17年度(2005)に整備基本計画を策定し、現在、整備第一段階である大手登城路の復元整備を行っています。

平成30年度(2018)に擬宝珠橋、令和2年度(2021)に表門を復元し、このたび渡櫓門が竣工したことで「中ノ御門」全域が完成しました。令和7年度(2025)より、鳥取城の天守に位置付けられていた「二ノ丸三階櫓」の復元に向けた調査事業に着手します。